

大原焼の「歴史」と「文化」を次世代に

○ 大原焼プロジェクト

《目的》

★大原焼の歴史や文化を継承し、次の世代に引き継ぎ、新しい大原焼の創造をめざす。

★「やきものづくり」を通じて楽しさや安らぎを創出し、人々がつながり、交流の輪を広げ、地域への愛着を深める。

《活動》

活動の開始は平成 28 年 5 月。月に 1 回の定例会で活動の計画や情報交換。

＜野焼き＞とその作品づくり。保存や調査。里庄町産業文化祭への参加や親睦を兼ねた研修旅行など楽しくやっています。



ほうろく



土びん



くど (かまど)

土がま



貯金箱



不動院・五重塔（供養塔）高さ 4 m

「伝統的大原焼」



山神社・狛犬（奉納物）



山神社
絵ほうろく



「野焼き」



大原焼の歴史

15 世紀後半（戦国時代）、大原の里で土器を焼いたのが始まりと考えられます。

17 世紀前半の＜里見山中遺跡＞（里庄町里見大原東地区）から鍋や播鉢や内耳鍋等の瓦質土器が出土しました。

記入銘のある最古の大原焼は元禄 12 年（1699）銘の宝殿（祠）があります。

江戸中期には産業として土器作りが大原で行われていた様子や江戸後期にはほうろく等の品々を諸州（瀬戸内沿岸）に送りだしている様子が史誌に書かれています。

明治から昭和初期にかけては里庄町の主要産業の 1 つでした。最盛期は明治の後半から大正です。

「火の器」である厨房具（ほうろく・鍋・土がま・くど・火消し壺等）や生活用具（こ

たつ・火鉢等）が主として生産され、薄くて丈夫で、火に強い大原焼の評価は高まり、生活必需品として人々に長く愛用されてきました。多くが型作りです。

しかし、戦後、エネルギーが薪から LP ガスへと変化し、高度経済成長とともに需要は減退します。そして、伝統的大原焼は昭和 60 年（1985）終焉を迎えます。現在は往時を偲ぶ窯跡などを見ることはできません。

プロジェクトは大原焼の保存・調査や記録をすると共にその歴史や文化から多くのことを学び、その「心と技」を次世代に引き継ぎたいと活動を始めました。